

国立公園と観光

国立公園とは？

国立公園とは、日本を代表するすぐれた自然の風景地を**保護**するために開発等の人為を制限するとともに、風景の観賞などの自然に親しむ**利用**がし易いように、必要な情報の提供や利用施設を整備しているところであり、環境大臣が自然公園法に基づき指定し、国が直接管理する自然公園です。

国立公園の指定の要件は、「**同一の風景型式中、我が国の景観を代表すると共に、世界的にも誇りうる傑出した自然の風景であること**」です。

日本では明治44年(1911年)に「日光を帝國公園となす請願」が議会で提出され、その後多くの人々の要望が高まって昭和6年(1931年)に国立公園法が制定され、それに基づいて昭和9年(1934年)3月16日に**瀬戸内海、雲仙、霧島**の3箇所が日本初の国立公園に指定されました。

初期の頃は、古くから民衆に親しまれてきた風景地である各地の名所・旧跡・伝統的な探勝地(富士箱根伊豆、等)や山岳など原始性の高い自然の大風景(中部山岳、等)が国立公園に指定されていましたが、その後、居住地に近接したレクリエーションに適した場所(上信越高原、等)も指定されるよ

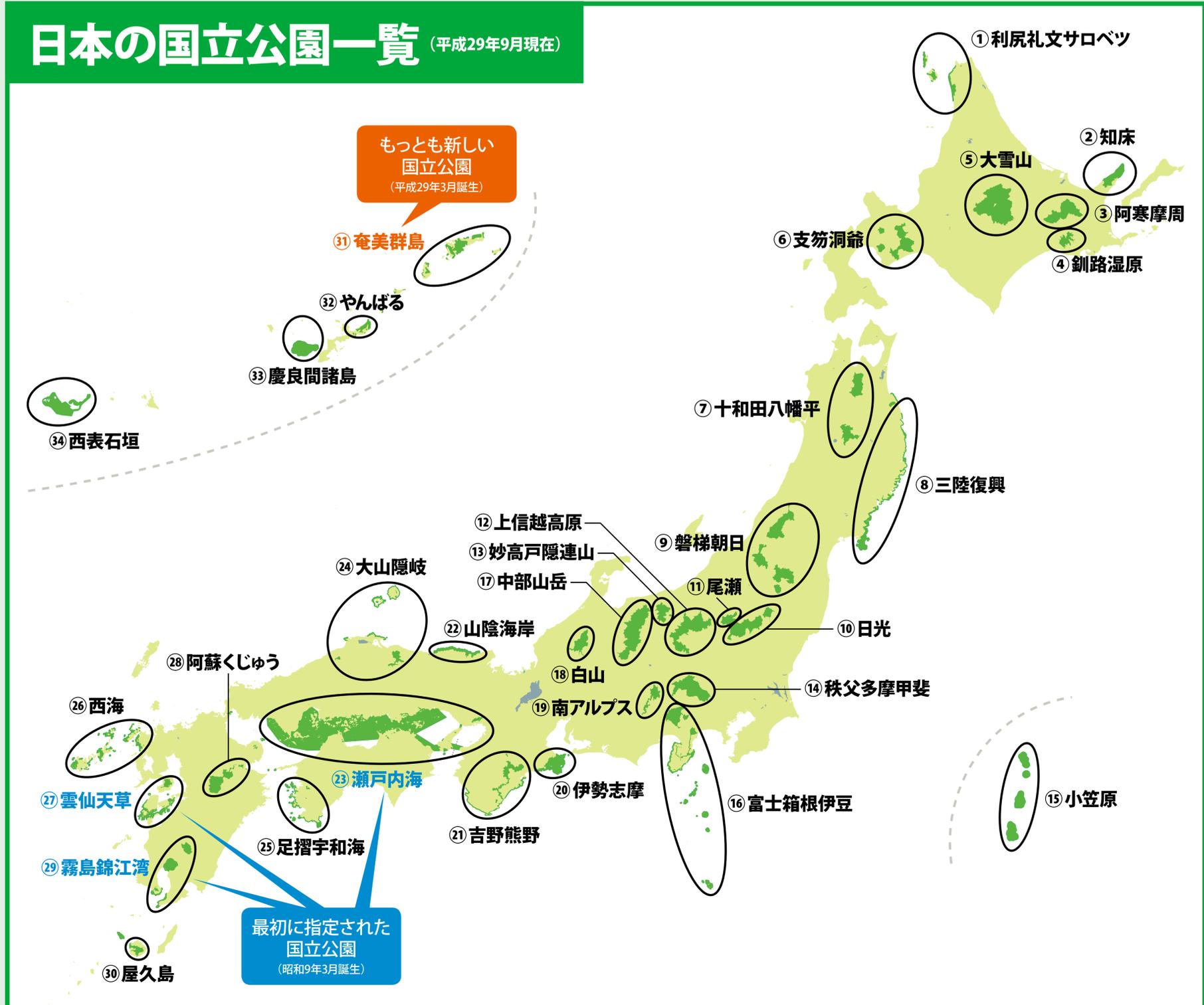
うになりました。

20世紀後半になってからは、すぐれた自然の風景地としての評価が多様化し、自然性の高い生態系の景観(知床、等)やサンゴ礁などの海域景観(足摺宇和海、等)、野生生物の生息地としての景観(西表石垣、等)や広大な湿原景観(釧路湿原、等)なども国立公園として指定されるようになりました。

狭い国土に大勢の人が住み、昔から土地をさまざまな目的で管理・利用してきた日本では、アメリカやオーストラリアなどのように国立公園の土地すべてを公園専用とすることが困難です。そのため、日本の国立公園は、土地の所有に関わらず指定を行う「**地域制自然公園制度**」を採用しており、国立公園内にも多くの私有地が含まれています。国立公園内に住んでいる人も多く、農林業などの産業も行われていることから、国立公園の管理は、人々の暮らしや産業などとの調整をしながら進められています。保護の面でも利用の面でも多くの利害関係者がいることから、多様な主体の連携による「**協働型管理運営**」が重要となっています。

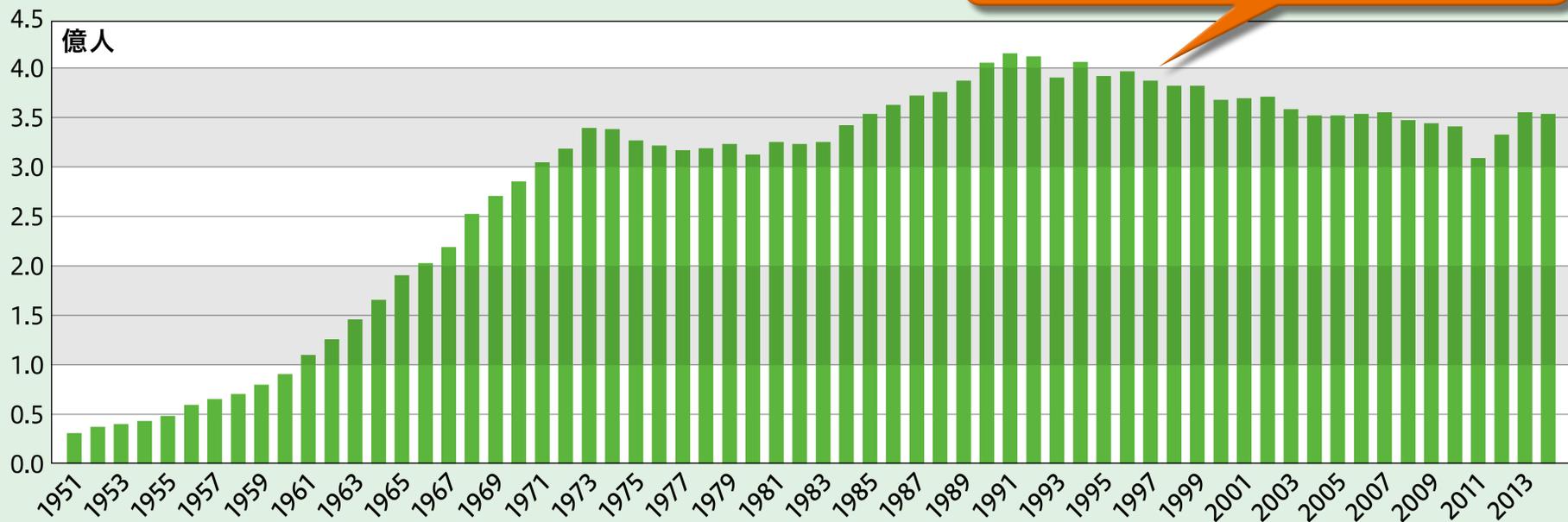
現在、日本には**34箇所**の国立公園があります(平成29年9月現在)。これは、**国土面積の5.8%**に相当します(平成29年3月時点)。

日本の国立公園一覧 (平成29年9月現在)



どのぐらいの人が訪れている？

年間延べ3.5億人が利用！
1990年代はじめをピークに微減傾向



資料：環境省「自然公園等利用者数調」

利用者数が多いのは？

利用者全体、訪日外国人ともに
「富士箱根伊豆国立公園」がTOP！

TOP5 (2014年)

順位	公園名	利用者数
1	富士箱根伊豆	12,390万人
2	瀬戸内海	4,240万人
3	上信越高原	2,616万人
4	阿蘇くじゅう	2,050万人
5	日光	1,609万人



訪日外国人TOP5 (2016年暫定値)*

順位	公園名	利用者数
1	富士箱根伊豆	258万人
2	支笏洞爺	83万人
3	阿蘇くじゅう	68万人
4	中部山岳	35万人
5	瀬戸内海	31万人



自然体験や登山だけでなく、観光活動も多い！
公園の特性に応じた活動を実施！

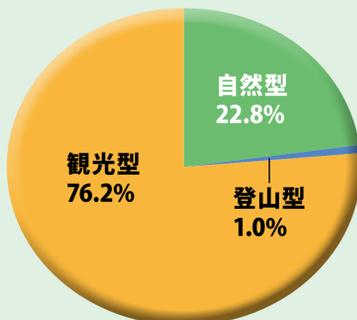
何をしている？ (知床、奥日光、上高地、立山の場合)

活動タイプ

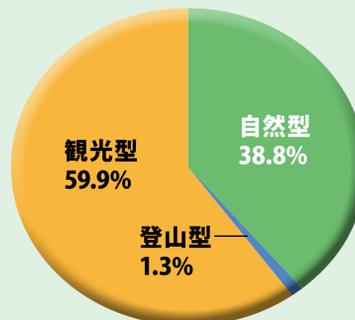
公園内で行った活動の対応分析より得た因子得点を利用し、クラスター分析によって公園利用者を以下の3タイプに分類した。

- 自然型：ハイキング、植物・動物観察等を中心とした活動
- 登山型：登山、キャンプを中心とした活動
- 観光型：食事、買い物、温泉、観光施設見学等を中心とした活動

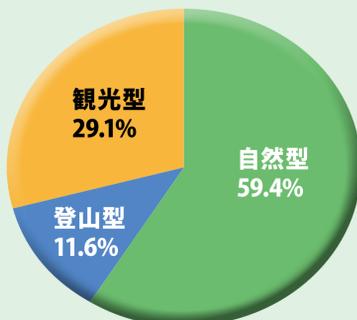
知床 (知床国立公園)



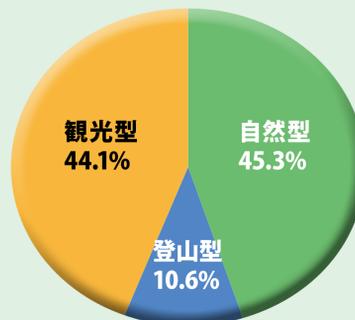
奥日光 (日光国立公園)



上高地 (中部山岳国立公園)



立山 (中部山岳国立公園)



資料：(公財)日本交通公社 (2012) 研究成果の紹介「国立公園の利用者意識に関する研究」観光文化215号

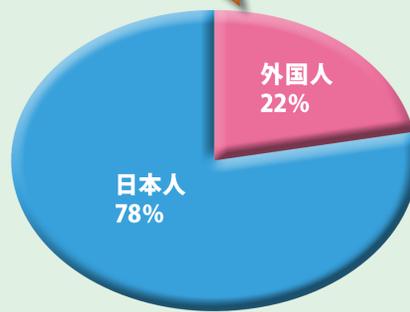
外国人旅行者は？ (富士山・吉田口の場合)

富士箱根伊豆国立公園に位置する富士山には、多くの外国人登山者が訪れています。より安全に富士登山を楽しんでもらうための基礎調査として、山梨県および静岡県では、外国人登山者の実態調査(カウント、聞き取り)を行っています。

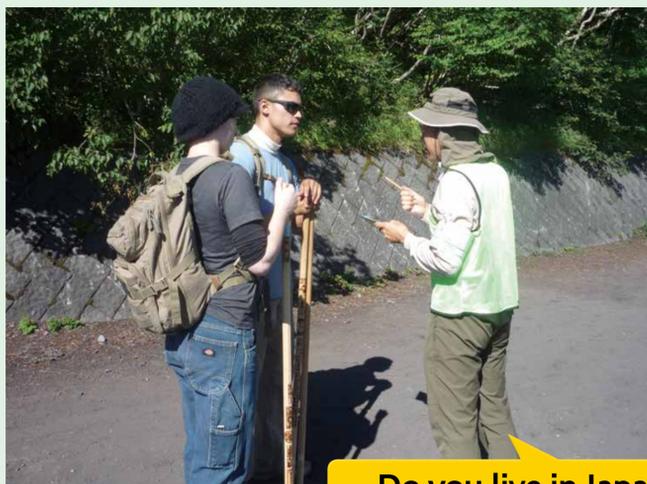
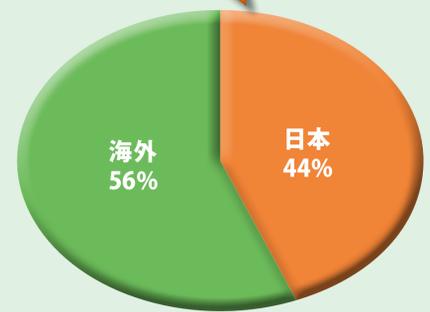


Where are you from?

富士登山者の
22%が外国人!



外国人のうち、
約半数は日本在住!



Do you live in Japan?

訪日外国人では台湾、
日本に住んでいる外国人ではアメリカ人がTOP!

外国人全体		海外在住外国人		国内在住外国人	
1 アメリカ	959	1 台湾	419	1 アメリカ	638
2 台湾	490	2 アメリカ	320	2 中国	205
3 中国	322	3 香港	171	3 ベトナム	141
4 香港	189	4 フランス	119	4 フィリピン	59
5 ベトナム	180	5 中国	117	5 台湾	57
6 フランス	158	6 韓国	113	6 フランス	34
7 韓国	140	7 イギリス	80	7 マレーシア	32
8 イギリス	108	8 カナダ	73	7 インドネシア	32
9 カナダ	92	9 ドイツ	67	9 ブラジル	31
10 フィリピン	83	10 オーストラリア	45	9 インド	31
	3,615 (人)	10 シンガポール	45		1,542 (人)

*居住地不明者を含む

*居住地不明者を除く 2,002 (人)

資料：山梨県「平成28年度富士山における外国人登山者動向把握調査業務報告書」(当財団受託実施)

何をもたらす？

「美しい景色」が
大きな感動を呼ぶ!

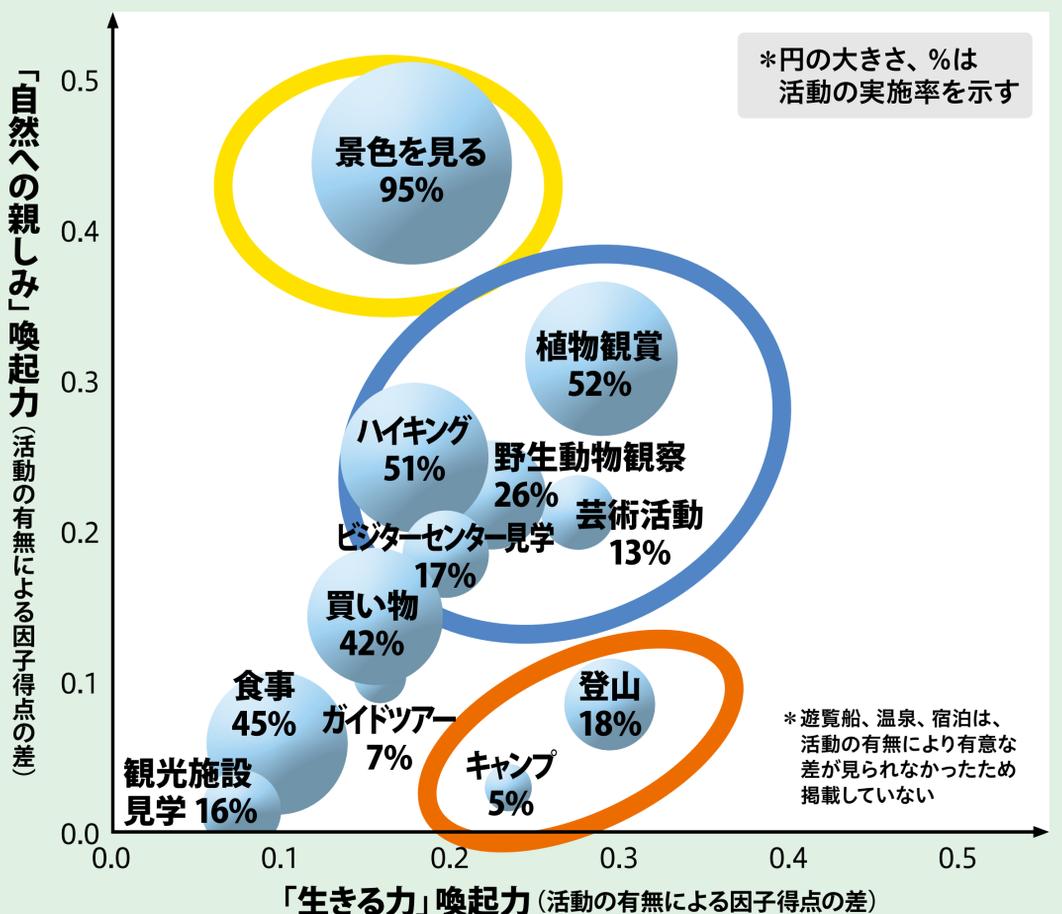
国立公園で得られた感動との関係性の強さ

満足した活動	オッズ比
景色を見る	12.91
植物の観賞	6.96
ハイキング	5.88
登山	5.37
芸術活動(写真撮影、写生など)	4.67
買い物	4.19
野生動物観察・バードウォッチング	3.92
クルージング・遊覧船	3.65
参拝・社寺・仏閣への訪問	3.58
ホテルや旅館への宿泊	3.45
食事	3.34
キャンプでの宿泊	3.18
ビジターセンター見学	3.17
ガイドツアーへの参加	3.08
温泉	2.99
感動した場面の印象	オッズ比
美しい	11.35
雄大だ	7.60
すがすがしい	6.46
開放的だ	4.90
落ち着く	4.81
神聖だ	4.76
親しみやすい	4.26
静かだ	3.58
荒々しい	3.36

*オッズ比：数値が大きいほど関係性が強いことを示している

国立公園を訪れることは、
「生きる力」と「自然への親しみ」をもたらす!
生きる力は「登山」や「キャンプ」によって、
自然への親しみは「景色を見ること」によって強く喚起される!

効用喚起力(活動の有無による因子得点の差) × 活動実施率



安達宏朗・五木田玲子(2012)「国立公園利用がもたらす効用・感動とは～自然公園利用者意識調査結果より～」国立公園705号
五木田玲子・愛甲哲也(2015)「山岳系国立公園利用者の感動、満足、ロイヤルティ、心理的効用の関係性」ランドスケープ研究78(5)

国立公園満喫プロジェクトとは？

我が国では、2020年の訪日外国人旅行者数を4,000万人とする「明日の日本を支える観光ビジョン（平成28年3月）」の施策に取り組んでいます。

この観光ビジョンの10の施策のひとつとして、環境省では、国立公園の「ナショナルパーク」としてのブランド化を目指し、まずは8か所の国立公園で「国立公園ステップアッププログラム2020」を策定し、訪日外国人を惹きつける

取組を計画的、集中的に実施しています。

これらの取組を全国の国立公園に展開し、2020年までに訪日外国人の国立公園利用者数1,000万人を目指しています。（2015年の訪日外国人の国立公園利用者は490万人）

選定された8つの国立公園

- ◎阿寒摩周
- ◎十和田八幡平
- ◎日光
- ◎伊勢志摩
- ◎大山隠岐
- ◎阿蘇くじゅう
- ◎霧島錦江湾
- ◎慶良間諸島

満喫プロジェクトの方向性

「最大の魅力は自然そのもの」をコンセプトに、非日常な体験を世界の人々に提供

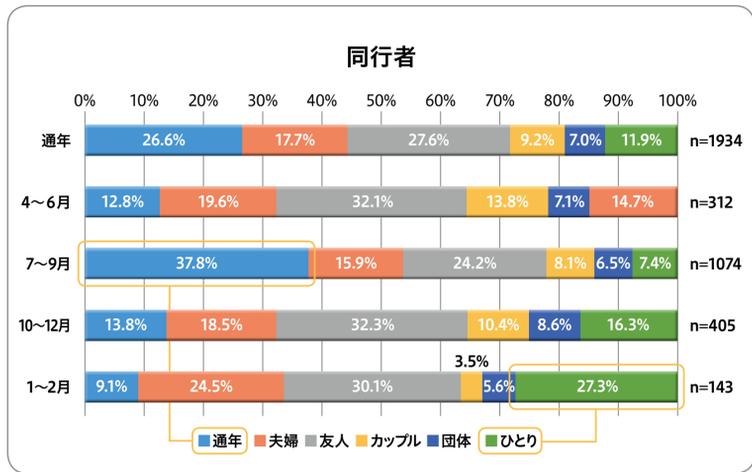
最高の自然環境をツーリズムに開放し、高品質・高付加価値のインバウンド市場を創造

国立公園来訪者アンケート*

来訪者の動向や意識を継続的に把握するため、8つの国立公園で、モバイル端末を用いたインターネット調査を試験的に実施しています。

アウトプットイメージ

季節別の旅行形態の違いを把握 ～夏は家族、夏以外は友人と、冬はひとりも



座間味村観光協会による来訪者アンケート（JTBF自主研究で実施）

- ・現地で観光客自身がスマホ等で回答！
- ・公園訪問の内容・意識を全国統一で把握！



システム概要

資料：環境省国立公園満喫プロジェクトホームページ
*国立公園来訪者アンケート調査は、環境省「平成29年度「国立公園満喫プロジェクト」推進業務」にて実施中（当財団受託実施）

自然公園研究会

自然公園研究会とは、自然公園（国立公園、国定公園、都道府県立自然公園）をはじめとする自然地域の管理や、望ましい利用の促進などについて、研究を推進し、知見を共有する研究会です。これまで、以下のようなテーマを設定して、関係者で議論してきました。研究会の実施にあたり、環境省国立公園課、一般財団法人自然公園財団、世界保護地域委員会日本委員会のご協力をいただいております。当財団が事務局を担当しています。

◎研究会活動

開催時期	テーマ
第1回 2012年10月	自然歩道を考える
第2回 2013年 1月	国立公園のブランドを考える
第3回 // 5月	自然公園の利用者調査を考える
第4回 // 9月	自然公園の有料化・入場料を考える
第5回 2014年 6月	ジオパーク・エコパークを考える
第6回 // 10月	文化的景観・環境文化と自然公園を考える
第7回 2015年 5月	国立公園の国際化を考える
第8回 2016年 2月	山岳地・トレイルの協働型管理を考える
第9回 // 9月	国立公園の利用を考える
第10回 2017年 5月	国立公園のインバウンドを考える

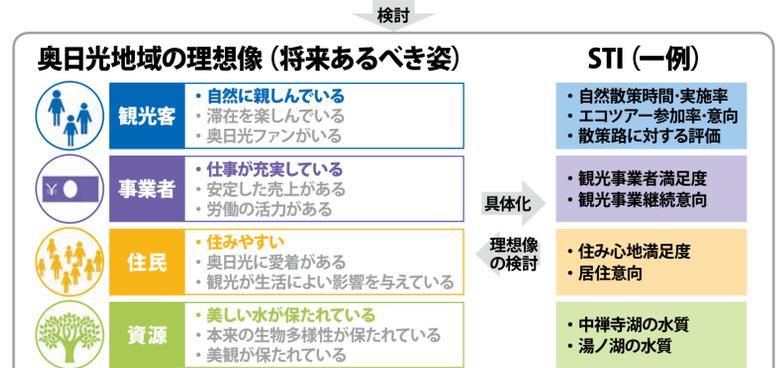
◎webサイト <http://shizenkouen.jp/>

当財団では、自然公園研究会で学んだ知見を活用し、様々な調査研究を行っています。

研究成果の一例

STI*奥日光モデルの概念図 ～「奥日光健康診断プロジェクト」より

「奥日光ファン倶楽部」+「地元自治会」を協働型管理の主役に設定
旅館協同組合/飲食物産店組合/交通事業者/ガイド事業者/観光施設/行政/自治会 など



*STI (=Sustainable Tourism Indicator) とは、観光地の持続可能性指標です。簡単に言うならば、「観光地における健康診断の診断項目」です。診断の方法として、観光客や地域住民、事業者に対するアンケートなどを利用します。

本研究は、環境省環境研究総合推進費「持続的・地域社会構築の核としての自然保護地域の評価・計画・管理・合意形成手法の開発」(4-1407)の一環として実施しました。

◎運営メンバー（五十音順）

北海道大学大学院農学研究院	准教授	愛甲 哲也
一般財団法人自然公園財団	専務理事	阿部 宗広
国際教養大学	教授	熊谷 嘉隆
東京農工大学大学院農学研究院	教授	土屋 俊幸
公益財団法人日本交通公社	理事/観光地域研究部長	寺崎 竜雄